

# 放送人の会

No.64

2014. 1.24

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel & fax 03-3221-0019 Mail [info@hosojin.com](mailto:info@hosojin.com)

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 佐藤真美子、須齋恵美子

## 新たな、大きな一歩を 踏み出す年に――

会長 今野 勉

明けましておめでとうございます。今年、「放送人の会」の歴史の中で、これまでになく新たな一歩を踏み出す年になるような気がしています。といいますか、そういう年にするといい気持ちを持つべき年だという気がしている、といった方が正しいのかもしれませんが、二、三述べて、新年の挨拶に代えさせていただきます。

### 新たな歴史のために新たな会員を

昨年、「放送人の会」が一般社団法人となったのを機に、新しい会員の勧誘を会として推進してきました。「放送人の会」は、これまでに、日韓中テレビ制作者フォーラムをはじめ多くの事業を継続的に行ってきました。それぞれの事業が十年以上の実績を持つようになってきた現在、その成果は、放送界の中でも、大きな意義を持つものとして注目され、評価されるようになりまし。

こうした事業は、これからも受け継がれていくべきだ、という認

識が会の内外に生まれています。つまりは、これらの事業を次世代に引き継ぐには、次世代の会員が必要だということになります。

新会員勧誘のプロジェクトが、石橋冠副会長を中心にして現在もすすめられています。理事の皆さんの努力もあつて、半年で四〇名を上まわる新会員が入会しております。このプロジェクトを、一過性のものと考えずに、常に次世代を意識して継続していく必要があると私は考えます。

会の活動に積極的に参加してくれる新会員はもちろん大歓迎なのですが、それと同じように大事なのは、色々な事情で積極的には参加できないが、会員に名前を連ね、年会費を納める、という会員が多く加入してくれることが、会の底力になるのだということも、忘れてはならないと思います。

### 横浜大会を新たなレベルに

日韓中テレビ制作者フォーラムは、ことしの横浜大会で十四回目を迎え

ます。このフォーラムが果たしてきた意義は、計り知れないものがありますが、それを踏まえて、新たなレベルで開催される必要がある、と私は考えております。

何が求められているか。

ひとつは、フォーラムの参加者同士のコミュニケーションの問題です。前回の無錫大会でも、同時通訳で聞いた他国の参加者の発言とその録音を持ち帰って翻訳した内容が、質量ともに違うことが解っております。また、公的な会合後の私的な交流の核となる通訳者が決定的に不足していたという事情もあります。

コミュニケーションの問題は、主催者や参加者の単なる熱意では解決できません。経費の問題もあり、簡単ではないのですが、新たなレベルでコミュニケーションできるよう努力したいと思っています。

さらに、横浜フォーラムが、地域の市民や制作者、研究者の参加を受けられるような仕組みになるよう目指したいところです。もちろん、会員の皆さんの参加はどうぜんのこととして期待しております。

まだいくつかが、本年を会の新たな一歩とするための思いはあるのですが、紙面が尽きました。いずれ折りに触れて――。

# 大量新入会員紹介

1月20日までに入会手続きが終わった方を紹介します。経歴、業績、担当番組などは本人からの申告だけを転記しました。申告のないものは記載しておりません。50音順。

**磯智明** (いそともあき) 66年9月生。NHK編成局コンテンツ開発センターC

P。テレビドラマ(裁判・事件もの)制作。90年NHK入局。大河ドラマ「毛利元就」「風林火山」などを演出。07年名古屋に異動。Pとして「刑事の現場」「監査法人」などを制作。10年ドラマ番組部。「平清盛」制作統括。13年から現職。受賞作・「トトの世界」「15歳の志願兵」「心の糸」

**市川哲夫** (いちかわてつお) 49年8月生。現在TBS「調査情報」編集長。これまで制作局でテレビドラマを多数制作。主な番組・「突然の明日」「港町純情シネマ」「代議士の妻たち」「課長さんの厄年」

**岩瀬弥永子** (いわせやえこ) 47年1月生。オフィス・ユー・アイ番組制作会社代表。ラジオ番組。パーソナリティー、フリー・アナウンサー。

四国放送TV「おはようくしま」初代司会者。朝日放送TV「エプロン」料理番

組)司会、四国放送ラジオ「日曜懐メロ大全集」パーソナリティー(現在も)

**上田洋一** (うえたよういち) 41年6月生

黒部市施設管理公社理事長。専門分野・農業、食糧問題、短歌。64年NHK入局。主に産業、経済番組などの制作に従事。編成部長、番組制作局長、審査室長を経て98年退職。著書・「謎のコメが日本を狙う」「小作農民の証言」

**大池雅光** (おおいけまさみつ) 60年9月生。名古屋テレビ放送コンテンツ局制作部。95年名古屋テレビ入社。受賞作・「生き生きまいらいふ」「名古屋行き最終列車」

**大野秀樹** (おのおのひでき) 53年3月生。(有)五年D組。ドラマプロデューズ、ドキュメンタリー番組ディレクター。主な作品(最近5年間)・「命のいろえんぴつ」「刑事一代」「未解決事件シリーズ」「グリコ森永事件」「オウム真理教事件」「尼崎殺人死体遺棄事件」「シリーズ・メルトダウン」「ぼくはなぜ止められなかったのか? いじめ・元同級生の告白」

**岡野真紀子** (おかのみきこ) 82年2月生。WOWOWドラマ制作部プロデューサー。主な作品・「なぜ君は絶望と闘えたのか」「学」「尾根のかなたに」

**小川治** (おがわおさむ) 57年9月生。㈱テレビ東京制作(PRDDTX)代表取締役社長。前職はテレビ東京執行役員ドラマ制作室長。ドラマプロデューズ多数。

主な番組・「出沒!アド街ック天国」。「角筈にて」。「新春ワイド時代劇」「宮本武蔵」「壬生義士伝」。「天国までの百マイル」。「ラブレター」。「シューシャインボーイ」

**尾田昌子** (おだあきこ) 61年9月生。㈱むげん企画取締役チーフディレクター。主な番組・放送大学テレビ授業番組、教育テレビ「日曜美術館」、ラジオ第2放送「古典講座」。「漢詩をよむ」。「文化講演会」

**加藤拓** (かとうたく) 69年1月生。NHKドラマ部。ディレクター。91年NHK入局。主な作品・「疾風のように」。「茂七の事件簿」シリーズ。「功名が辻」。「坂の上の雲」第3部。「八重の桜」

**亀谷弘美** (かめがやひろみ) 57年1月生。番組販売。㈱テレビ朝日サービス役員待遇。コンテンツ事業局長。77年テレビ朝日サービスに入社。以来主にテレビ朝日で放送された番組を全国地上波局、BS局、CS局に販売してきた。

**黒沢淳** (くろさわじゅん) 63年3月生。

㈱テレパック。プロデューサー。86年テレパック入社。

主な作品・「八日目の蟬」「カレ・夫・男友達」「激流」「つるかめ助産院」「キヤットストーリー」。「なぜ君は絶望と闘えたのか」

**小玉滋彦** (こだましげひこ) 60年8月生。TBSテレビ・メディアビジネス局映像事業部長。86年TBS入社。編成部、制作部勤務。制作では主にバラエティ、「オールスター感謝祭」などを担当。編成ではドラマ「ヤンキー母校に帰る」「サラリーマン金太郎」映画「突入せよ!あさま山荘事件」などの企画を担当。04年営業。08年WOWOWに出向。ドラマ制作部という部署を新設。11年から現職。

**近藤一男** (こんどうかずお) 57年8月生。大映テレビ㈱代表取締役社長。79年大映テレビ入社。08年社長就任。

**佐藤敦** (さとうあつし) 55年6月生。NTV制作局専任次長プロデューサー。79年日活撮影所入社。助監督、AP、企画営業をへてPに。94年NTV入社。ドラマを中心に映画制作の企画プロデューサー業務。主な作品・「世にも奇妙な物語」「僕たちのドラマシリーズ」「家なき子」「星の金貨」「伝説の教師」。「火曜サスペンス劇場」土曜ワイド劇場ほかの2時間ドラマ多数。

**崔 銀姫** (ちえうんひ) 69年4月生。  
佛教学准教授。メディア論

**寺島高幸** (てらしまたかゆき) 47年4月生。  
テレビプロデューサー。㈱テレコムスタッフ代表取締役

73年テレビマンユニオンコマーシャル入社。92年から現職。元ATP副理事長。  
現在「世界の街道を行く」「Edge2」「新しいキズナ」などをプロデューズ。

**東城佑司** (とうじょうゆうじ) 31年7月生。  
ドラマ、バラエティ、関連事業のプロデューズ。㈱テレキャスト㈱PDSを経て現在㈱メディアミックス(MMJ)代表取締役社長。

主な作品・「君の手がささやいている」「アルジャーノンに花束を」「アットホームダッド」「結婚できない男」「特命係長只野仁」など多数。

**中込卓也** (なかごめたくや) 64年6月生。  
ドラマ制作。

87年NTV映像センター(現アックスオン)入社。01年テレビ朝日入社。

**西 憲彦** (にしりのりひこ) 68年6月生。  
㈱日テレアックスオン 日本テレビ人局出向副部長。テレビドラマのプロデューサーが専門。  
主な番組・「夜逃げ屋本舗」「隣人は秘かに

笑う」「フードファイト」「真藤さん」「リマダム」「ギネ 産婦人科の女たち」「ヤングブラックジャック」

**西村与志木** (にしむらよしき) 50年5月生。  
NHKエンタープライズメディア編成エグゼクティブプロデューサー。

76年NHK入局。83年モンテカルロ国際テレビ祭グランプリ受賞。86年文化庁芸術祭作品賞受賞。06年「坂の上の雲」E.P. 11年芸術選奨文部科学大臣賞。12年から現職。

**逸見京子** (へんみきょうこ) 66年2月生。  
オフィス・ヘンミ、CALをへて現在フリーのドラマ企画者。

主な作品・「水戸黄門」土曜ドラマ「事件」シリーズ

**星野輝一** (ほしのてるかず) 74年9月生。  
札幌テレビ制作局制作部 情報番組(生中継)、ドキュメンタリーなど担当。

99年札幌テレビ入社。「ズームイン朝」などを担当。05年NNN年間最優秀ディレクター賞受賞。ドキュメンタリー「まつすぐに智華子」で多くの賞を受賞。

**牧之瀬恵子** (まきのせけいこ) 68年6月生。  
NHK WORLD番組契約ディレクター 専門分野・国際報道番組(ドキュメンタリー、ニュース、インタビューなど)、日韓関係、国際関係(U.Nなど) E.U、フラ

ンス、文化外交、国際政治  
職歴・NHKと94年番組契約、ジャパ・インターナショナルジャーナル、WOW、TBSなどでは90〜94年。

**宮崎 洋** (みやざきひろし) 47年5月生。  
テレビ朝日、テレビ朝日クリエイティブ美術。

主な作品・「ニュースステーション」のセットデザイン、ドラマ「点と線」

**本木敦子** (もときあつこ) 58年8月生。  
㈱ドキュメンタリージャパン代表取締役プロデューサー。

山形放送DJ、「主婦と生活社」記者、電通を経て92年からドキュメンタリージャパン。

主な作品・「障害者イズム」「養老寺町の虫眼鏡」「キャン・スペシャル 発掘! ロール皇帝最期の館」「ハプスブルグ帝国」「わたしが子どもだったころ」「色と生きる 染織家志村ふくみ」「市川亀次郎 異端を継ぐもの」「城 王たちの物語」「中国に君臨した女たち」「昔 男ありけり」「幻想美術館」「ホテルノスタルジア」「ホテル時間旅行」

**門奈昌彦** (もんなまさひこ) 36年5月生。  
セット・デザイナー。テレビ日本美術家協会会員。

40年NTV芸能局美術課デザイナー入社。20年NTVアート。現在フリー。

担当番組・「昨日、悲土別で」「菊次郎ととき」「玩具の王様」「星の金貨」「高校生レストラン」「子供が寝たあとで」「終の夏かわ」「お熱いのがお好き」「恋も2度目なら」「たんぼぼ」「おせん」など。

**山鹿達也** (やまがたつや) 71年8月生。  
テレビ東京編成局ドラマ制作部プロデューサー。  
主な作品・「新春ワイド時代劇」「鈴木先生」「三匹のおっさん」

**吉村兼介** (よしむらこうすけ) 36年9月生。  
フリーカメラマン。元NHK制作技術局。

59年NHK編成局映画部撮影課配属、首相官邸(ニュース応援)で安保自然成立時の岸首相を撮影。「蔵王の樹氷」「志賀高原・発晴温泉の入浴する野猿」など撮影。仙台、福岡、大阪、東京の各局に勤務。20年〜24年NTS。現在フリー。

### 第11回 人気番組メモリー 題名のない音楽会

テレビ朝日、1964年〜現在放送中  
日時・2月11日(火・祝日) 13時〜  
場所・浜離宮朝日ホール  
(大江戸線築地市場駅下車すぐ)  
ゲスト・富田勲(作曲家) 高嶋さら子(バイオリニスト)、鬼久保美帆(P)  
司会・大山勝美(芸員)  
入場無料

# 2014新春挨拶・所感

軽井沢朗読館便り

青木 裕子

あけましておめでとございます。  
いつも軽井沢朗読館を応援して下さい  
ありがとうございます。

昨年は軽井沢町立図書館の館長の仕事に就いて、初めてのことにあたふたと忙しく、軽井沢朗読館のお知らせをなかなかお届け出来ず「朗読館は無くなっちゃったの？」というお声をいただいたりで「心配をおかけしました。だいじょうぶです。ちゃんと続けています。今年はお知らせやホームページの更新など、しっかりと頑張ろうと気持ちを新たにしております。これからもお力添えのほどよろしくお願いいたします。

昨年はいろいろなことがありました。  
特に9月19日にパリの日本文化会館で、9月22日にはスイスとの国境に近いフランス、ポークール市で「アンドレの翼の朗読会を行い大成功を収めました。ひとえに皆様のおかげです。

ストーリーは1936年にパリ〜東京間100時間冒険飛行に挑戦し佐賀県の背振山に墜落したポークール出身の冒険

家アンドレ・ジャッピーと、その時彼を救助

した脊振村の人々の結んだ日仏の友情物語を、私と友人(ジャッピー一族のフランス

女性の40年来の交流をヒントに、歴史と現在を絡めて書き下ろした朗読劇です。

今年10月には、パリで共演して下さい  
た女優で劇団主宰者のバンダ・ベヌさんを

フランスから日本にお迎えし、2週間の日本縦断朗読ツアーを行います。詳しい日程

など日にちが近付きましたらまたご案内させていただきます。

\*\*\*\*\*

## 嘘のような本当の話

石橋 冠

倉本聡さんは、いまなおボクの師匠だが、最初は何のキツカケで知り合ったかと想

い返しているうちに、微笑みと感動とが同時に押しよせてきた。

35年ほど前の話だ。

若気のいたりして脚本を無断改訂してしまい、放送作家協会に呼ばれてその咎を責められ、さらに機関誌上で厳しく指弾されたことがあった。

相当に落ち込んでいたとき、面識のない若い脚本家がボクのデスクを訪ねてきた。

義憤に駆られ、対面して抗議したいと言う。

つまり、ボクは知らない人に不意に叱られたのだ。

その人が倉本聡さんだった。

二人きりだったので、改訂に走ったボク

なりの「やむを得ぬ事情」を説明したが、まったく相手にされなかった。ただ、彼の熱い正義感に気圧されてしまっていた。

帰りぎわ、倉本さんは静かな口調でこう言った「次はボクと仕事をしまえ」。人

気番組となった「2丁目3番地」は、そのとき始まったのだった。

そう言えば、試写室に何回か無断で侵入していたTBSの久世光彦さんと知り合ったのもこの番組だった。NHKの和田勉

さんに至っては「乱入」だった。浅丘ルリ子さんに逢いたいとスタジオに来たので、

本番が終わるまでサブコンで待っていた

だったのだが、その客人が本番中、ディレクターのボクの背後から「もっとアッ

プ！」と叫んだのだ。

嘘のようなホントの話である。

思えば「入構証」などというものがあつたら、起こりえないことばかりだった。

「若さ」と「情熱」の行き交う良き時代だったというべきか。

\*\*\*\*\*

## 謹賀新年

磯村健二

東京にもどりました。お役にたてること

があれば……

\*\*\*\*\*  
あけましておめでとございます  
市岡康子

昨年は「終活第一弾」と称して、取材中に撮りためたスライド整理にかかりました。30年以上前のものもあり、自分で撮影しながら記憶が不鮮明なため、当時のフィ

ールド日誌や報告書を読み返す作業からはじめることになりました。目のまわるような動きをしている若さのパワーに感嘆

したり、挫折続きで落ち込んでいるあの日の自分に同情したり、図らずも取材自分史

を追体験しています。

今年も皆様に幸多きこと、お祈り申し上げます。

\*\*\*\*\*

## 新年のご挨拶

石橋 健司

新年、明けましておめでとございます。  
昨年は、「放送人の会」に入会させて頂き有り難うございました。著名で、素晴らしいお仕事されている皆様のお仲間に入

れることは大変名譽なことでございます。色々ご指導、ご教授賜ればと思

います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

さて、昨年は、長引く不況が、アベノミクス効果で歴史的な株高、円安となり、消費の好転や企業業績の上昇で、景気が回復

したと報じられています。しかしながら、映画や有料テレビの市場は、どうもその実感がなく、むしろ危機感を募らせているのではと思います。

総じてエンターテインメントの業界は景気に左右されづらいと言われ続けていましたが、長引く景気の低迷は、コスト削減による制作予算の縮小が定着化し、一方2次利用等の販売価格の低下傾向が利用者の増加に結びついておらず、むしろ全体的なパイの縮小をもたらしているのではないかと思います。加えまして、次世代を担う若手制作者の育成など課題は先送りになっている気がします。

今年は60年に1度の甲午（きのえうま）の年、前回の昭和29年は、日本の高度経済成長が始まった年で、甲午は反転、変革に例えられています。

経済のグローバル化が進んでいく昨今、昨年は、4K・8Kやスマートテレビが登場し、総務省の放送コンテンツ海外展開促進機構や経済産業省のクールジャパン機構など海外支援事業などが相次いで設立されました。普及や促進のエンジンは、コンテンツにあります。今年も、技術革新や売り場面積の増加でコンテンツ市場が活性化し、制作環境が活性化していく、そのような好循環が生まれるような変革、反転の年になることをとても期待しています。今年もよろしくお願いいたします。

\*\*\*\*\*

## 「初心忘るべからず」をローカル・ドラマに見る

遠藤利男

毎年秋に「東京映画祭」と並行して行われている「国際テレビフェスタ in Tokyo」で、ソフトの輸出にドライブをかけようと言う趣旨で番組のコンクールが行われている。しかしその祭りのさまざまな副賞と言ったような形で、「ローカル・ドラマ」のコンクールが行われていることを知っている方は少ないだろう。私はここ数年事務局に頼まれ、その参加作品の選考事前準備を手伝って来た。

民間放送の作品5・6本。NHK作品やはり5・6本。秋の始め忙しい時期だが、楽しんで見させてもらっている。なぜならばしばしばそこに、テレビドラマの初心を窺い見ることができる。

この数年間見てきて感ずるのは、民放もNHKも地域局のドラマ制作力が飛躍的に向上していることである。勿論現在には機材の小型軽量化、編集機器の進歩等がどの地域局にも行き渡り、また学生時代から映像制作に取り組んでいたディレクター、カメラマンも多く地方にいますと考えられるが、それだけで作品の質が上がるとは言えないのは、皆さんご存知のとおりである。問題はディレクターと局が、地域と地域性にどのように向いあっているかと言うことである。

しばしば、「ローカル・ドラマ」（多分に

日本放送界の蔑視の視線が感じられる言葉である。私はあらゆる文学も演劇もドラマも地域性抜きにしては存在しないと考えている）は地域の伝統やイベントを取り上げ、それと取り組む若者や家族と言ったパターンが多く、並の作品には成り得ても傑出してわれわれに迫ってくるものには成りきれなかった。勿論図抜けた作品もあった。例えば2010年HTV制作「ミエルヒ」は本賞の全ての作品を超えるほどの作品であった。2012年、東海テレビは長年取材蓄積した記録映像とドラマで構成した「名張毒ぶどう酒事件」で、日本と日本人について考えさせまたテレビの原点を思い起こさせた。

しかし最近では、ひと皮むけたと言うか一段深まったと言うか、ほとんどの作品がまたディレクターが、地域と地域性に鋭くそして暖かい目を据え、それを通して日本人を描こうとしている。ちなみに2013NHK徳島放送局制作「狸な家族」と名古屋テレビ制作「名古屋行き最終列車」である。

「狸な家族」は「鶴瓶の家族に乾杯」を

パロディ化しながら徳島の山村の家族の再生を描き、「名古屋行き最終列車」はローカル線の最終に乗る庶民の哀歓を描き心を打った。名古屋テレビのスタッフは初めてのドラマ作りであり、この賞のお蔭で次年もドラマ制作が許されると喜んだ。ほかにも目頃はローカルの情報バラエティの制作に追われるPDがつくった作品や、宮崎で口蹄疫のドキュメンタリーを作ったPDがドラマでしか表現できないと作った作品もあった。

ローカルでドラマを作ることは確かにその局の総力を挙げるイベントだが、同時に何故ドラマなのか何故テレビなのかの初心に帰る機会でもあり、みるわれわれにもテレビとは何であったのか思い返させる機会でもある。

ここまで書いた時、電話が鳴った。NHK名古屋放送局の番組ディレクターからである。「名古屋局のテレビ放送60周年に当たり番組を企画しているが、局のアーカイブスにあなたが昭和37年に名古屋で制



作した芸術祭奨励賞の『汽車は夜九時につく』が残っています。これについてお話を聞きたいのですが」と言った。これこそ私の初心の作品「ローカル・ドラマ」である。これについてはまたの機会に書こう。

\*\*\*\*\*

一日の終わり

### 大蔵雄之助

過日家人が集中治療室から帰宅して以来、出稼ぎの経験しかない男が専業主夫に変身し、要介護3の看護人となった。

昔家庭内労働の第一だった掃除は「四角い部屋を丸く掃き」の要領で済ませる。洗濯は簡単だが、物干しは容易でない。意外に体力を要する上に、常に天候に留意していなければならぬ。雨天ともなれば室内は満艦飾、湿気むんむんである。乾いたあとに衣類を畳むのも一苦労。アイロンはかけない。

食事は関連の雑誌・書籍の多彩に先ず一驚。テレビの料理番組は一応の腕前なしでは追従不能なるも、詳細なる記録に従い、「調味料小匙三分の一」、「中火で四分半」等の難調理法を厳守すれば、中流料理店超の味付けに成功する可能性なきにしもあらず。ただし、玉葱、馬鈴薯、人参、南瓜、蕪、茄子、蓮根、大根、胡瓜、白菜、隠元豆、長芋、その他もろもろの使い残しの半端な野菜が冷蔵庫に溢れんばかりにして

次の出番待ちあるを見る毎に、当方策なきを嘆く。後処理は食洗器——ただし、下準備を怠ると重大な裏切りに直面する。

この間に書信の整理、ダイレクトメールの開封(何か無料で貰えるものがあるかも知れず)、資産家向け金融商品特別提供の電話を冷静に辞退、宗教家の勧誘訪問にも応対する。

食材の買い入れはネットに依存することも出来るが、それもそれなりに面倒。郵便の投函と銀行の振込みには出向かざるを得ないので、ついでにスーパーに行くことが多い。

新聞は一紙につき十分間で十二分と決めているものの、興味ある特集や対比のための読み返しもある、結局一時間以上つぶす。物事を思考する力は頓に衰弱し、情報の取得は専ら夜のテレビに頼る。即ち、NHK『ニュースウオッチ9』、引き続きテレ朝『報道ステーション』、時間順では次はTBS『NEWS』、面白くなければNTV『NEWS ZERO』、それからフジ『ニュースJAPAN』。時にテレ東『WS』に迷い込むこともある。

このニュース追っ掛けは予期せぬ特ダネに遭遇することがある。文月メイというシンガーソングライターの「ママ」がYoutubeで数十万回再生されているにも拘らず歌詞が過激だとの理由で有線が取り上げないことにしている、と説明してちょっとだけ歌を流した。魅せられた。その後この話はこの局でも完全に存在を無視

されている。刑法に触れるような猥褻でも扇動的でもないものを簡単に放送禁止にして葬るのは許されることであろうか。これだけ多数の人が共鳴しているのはもはや社会現象である。公共の電波媒体は碌でもない芸人のゴシップよりも真面目に、実の親による児童虐待の世間相を論議する方が使命に相応しいのではないか。

日付が変わればやっと思時間になる。すぐ寝るには惜しい。かと言って硬い書物をひもとく気力もなく、横になつて久しぶりにベストセラー小説を手にするや、病みつきになった。最初は三浦しをん『舟を編む』、続いて小川洋子『ことり』、それから百田尚樹『永遠の0』、浅田次郎『一路』もはや生産性を放棄して消費一筋……本の重さに耐え兼ねてやがていつか安らかに夢路を辿る。

\*\*\*\*\*

コントローラ・コントロール

### 大類 啓

1982年7月4日、取材のため東欧の社会主義国ポーランドの大地を一步踏んだ。当時、同国は一党独裁に加え「連帯」封じのため戒厳令が布告されていた。あらかじめ指定されていた外国人専用ホテルに着き山形の本社に連絡しようとして部屋の電話の受話器を取り上げると、いきなりテープが流れ女の声が「コントローラ「コントローラ」……と繰り返す。

驚いていると通訳は「戒厳令で電話はコントロール(管理)されている」という。

早い話が体制側の「脅し」だが、慣れない取材者は一撃で落ち込んでしまう。街角には戦車まで見え隠れしていた。戒厳令下の人たちはいつもキョロキョロと周囲を見渡しているようだった。外国人と接触できるのは許された人たちのみのようである。汗ばむ季節なのに乾いた空気がピンと張り詰めていた。

あれから30年余。ポーランドはとつとくに民主化された。だから、あの時の不気味なテープの言葉と出会う、それも日本では思ってもみなかった。昨年9月、IOCの五輪招致総会で原発の放射能汚染水対策を問われ、安倍首相は「状況はコントロールされている」と断言した。これで日本招致が決まった。安倍首相がIOCで使った「コントロール」は、「懐柔」と解釈した方が分かりやすい。

続いて12月、「特定秘密保護法」が成立。同法は特にメディアで激しい議論を呼んだ。新聞、出版、映画、演劇、文学は直ちに抗議声明を発表した。ただ、放送界の反撃はいま一つではなかったか。さらには年末に沖縄県の仲井間知事が安倍首相の負担軽減案を「驚くべき立派な内容」と讚え、埋め立ての問題はあっさり解決した。30年前に聞いた「コントロール」が裏道でウロウロし出し、表通りに出たがって、いるような構図がうすら見える。

\*\*\*\*\*

## 初春の憂鬱

### 大山勝美

昨年の秋から厄介な病気でイライラさせられている。「腸閉塞」である。内臓を手術した人につきものらしく、大相撲の北の湖理事長も、同じ病いで入院中で初場所の挨拶が九重親方にならなっていた。

とにかく痛いのである。気分が晴れない。腹に力が入らない。しかもクセになる病いというから厄介なのだ。

いや、もつと厄介で困ったことは、安倍政権の姿勢である。現職総理として「靖国参拜」で、中国、韓国を逆なでし、アメリカ、EU、ロシアなど国際社会をイラつかせている。

そして、教を頼んでの「特定秘密保護法案」の強行採決。さらには「平和憲法」にまで手をつけようという気配だ。すべて好戦国だった戦前型の「つよい日本帰りを志向してのよう、腹立たしく、怒りを覚えるほどである。

私がジャーナリズムのひとつ「放送」に関わりたと思った原点は、少年時代の「戦争体験」である。

旧満州にいた小学生時代、治安維持法のもと「不敗の神国日本」を信じこまされ、太平洋各地での勝利の知らせに酔わされていた。

終戦の前年に、両親とわかれて鹿児島に帰った。海軍兵学校入学の夢を果たしたためである。本土の中学からの受験が有利

と俗説がまかり通っていた。

昭和20年、鹿児島島の空襲ははげしくなる。市の90%は焼失した。米軍機の機銃掃射に数回あい、旧友の何人も失った。防空壕の中で聞くシユルシユルと爆弾の落ちてくる音に、耳をふさいで震えていた。そして終戦。ホツとしたが、両親とは音信がとどえた。よく聞いたのがラジオの「尋ね人の時間」である。

ラジオの中に衝撃的な番組があった。「真相はこうだ」である。戦争中の日本と連合軍の戦争の実体を劇形式で知らせる内容の番組であった。

戦争中聞かされていた日本中の「勝った」「勝った」はすべて嘘で、負けつづけていた真実を知らせるものである。

「だまされていた！」軍と国家に。ショックが過ぎると怒りがこみあげてきた。報道は正しく国民に知らせるべきだ。たとえ戦争であつても。アメリカは真実の報道を行っていると知るにつけ、自分は、世の人々に正しい報道をする側に立ちたい、そのためには新聞記者になりたい。そう思うようになった。

「社会の木鐸」という言葉が通用していた時代である。

「特定秘密保護法」は「治安維持法」に通じかねず、表現、取材の自由が侵される可能性ありと各方面、各界からの反対の声は集会やデモを含めて多かつた。

「権力の監視」をモットーとする新聞を中心にメディアも反対した。「放送」はな

ぜか及び腰にみえた。各番組に丁寧にあつたわけではないのだが。テレビは「論評」論説を加えないメディア」の特性をあらわしていたように思った。

山田太一さんに逢つたら「放送の人たちから反対の声はあがりませんね」と言われた。私は「個人的には戦争体験者として反対です」と答えるに止まった。

だがやはり今からでも「放送人の有志」として『施行反対の声明』を出すべきではないのか。「賛同の人々手を挙げて下さい！」と、この会報で呼びかけようとした。

「だが、一寸待て！」ともう一方の内面の声が聞こえてきた。ことは横浜で「日韓中テレビ制作者フォーラム」が開かれる。大会成功には政府、行政を含めて支援を頼みたい。資金のためにも。

そのとき、たとえ「有志」でも反対のアピールは足かせになりませぬか。そう思い出すと厄介である。腹に力を入れての「反対！」は言いだしにくい。いやはやである。初春から、厄介なことを抱えて、寒の遠のく春を待っている、今日此の頃なのである。

\*\*\*\*\*  
新春に想う

### 加藤滋紀

暮から正月にかけて、私は一冊の本を読んだ。辻井喬(堤清)著『茜色の空』。

元首相・大平正芳の伝記小説である。

吉田茂と池田勇人、大平正芳と繋がる人脈と、岸信介と福田赳夫らの人脈の間で死闘が繰り広げられる。しかし、興味深いのは、これは単なる権力闘争ではなく、両陣営には歴史認識や思想に大きな違いがあることだ。吉田らは、平和憲法を大事にし、アメリカからの再軍備の要請をのりくくりとかわしながら経済発展に重きを置こうとする。一方の岸らのグループは、自主憲法を制定するとともに再軍備をして、文字通り独立国の体裁を整えようと目論む。

『茜色の空』はフィクションをまじえた小説として描かれているので、多少割り引いて受け取る必要があるが、それでも、当時の与党の中に大きな路線の対立があり、それで巧みに政治のバランスが保たれていたことは確かだろう。

翻つて今日の日本の政治状況を見ると、「一強多弱」と表現されるように、強い与党は好きなように政治を動かす、一方の野党はまともに与党の動きをチェックできないばかりか、与党にすり寄る始末。これでは民主主義の行方が心配になる。

「多弱」の野党にも問題はあるが、大平が活躍した時代のように権力を持つ与党の中に批判勢力があれば、つい期待したくなる。しかし、今の自民党には大平に薫陶を受けたリベラル派はもういない。いや、いたとしても声を上げようとする。

『黄色の空』には、他にも興味深い話  
が記されている。大平首相が中国の首脳  
の招きで訪中した際に行った講演が中国  
全土に中継された。その翌日、大平夫妻  
は西安を訪れたが、「熱烈歓迎」のプラ  
カードと日の丸の小旗で沿道が埋まった  
という。

それから三十四年。中国が変わった  
のか？ 日本が変わったのか？ 日本の  
首相が中国で歓迎される日が再びやって  
来るだろうか？

\*\*\*\*\*

### がしゅん

北村充史

馬酔木（「あせび、あしび」葉に毒があり

馬が食べると酔つてめまいがするという）

馬腦（「めのう」宝石の名）

馬克斯（「マルクス」と読みます）

帰馬千華山之陽（「うまをかざんのみなみ

にかえず」周の武王が殷を滅ぼしたのち、

軍馬を華山の南に帰し放ち、再び戦いを起

こさない意を示した）

天馬空を行く（考え方が自由奔放であるさ

ま）

千里馬（「せんりのうま」すぐれた若者の

たとへ）

寒翁馬（「さいおうがうま」人生は吉凶・

禍福が予想できないものです）

\*\*\*\*\*

### イルクーツク、未明の怪

木村 成忠

また電話が鳴った。午前4時半だ。「も  
しもし」というと、やはり女がロシア語を  
しゃべってきた。ロシア語は挨拶程度は分  
かるが、電話での会話は無理。「クトー？  
（誰）シトー？（何）」と言ってみたもの  
のこれではダメだと思ひ日本語で「こんな  
時間に何の用事だ！失礼だぞ」と声を荒げ  
電話を切った。去年8月15日、東シベリ  
アの中心都市イルクーツクのホテルでの  
出来事である。シベリア鉄道に乗り、約2  
00年前ここで暮らした石巻の漂流民の  
足跡を辿つて8年ぶりの再訪だった。

また、と書いたのはその4時間前、午前  
0時半頃ドアを叩く音で妻が起された。  
私は気づかず寝入っていた。妻は訝しく思  
い応対しなかった。

ほどなく今度は電話が鳴り、この音で私  
も目覚めた。妻はツアー添乗員からの緊急  
連絡かと思ひ電話をとった。「……どんなこ  
用件でしょうか。わたしロシア語分かりま  
せんので……電話切ります」と戸惑いの  
反応。女がロシア語でしゃべってきたとい  
うが、妻は私以上にロシア語が分からない  
。深夜と未明にドアノックと2度の不審な  
電話。誰が何のためにと不安になった。  
二度目の電話から5分もたったろうか、  
またノックだ。まるでホテル内の同じフロ  
アで待機していたような短い間隔だ。妻は  
震え上がった。実はその7日前私たちと同  
じ飛行機でハバロフスク入りした日本人  
男性が拳銃を持ったロシア人3人に襲わ

れ所持金とパスポートを奪われた事件を  
聞かされていた。

ノックは執拗に続く。ドアのぞき穴か  
ら外を確認すると30代半ばか豊満な女  
が見えた。見張りなのかしきりにエレベ  
ーターホールの方を気にしている。ノック役  
は別にいるようだ。私は怒鳴った。「クト  
ー！シトー！何なんだよ一体！」。

相手は無言。すると今度はドアノブをガ  
ツンガツンと回しはじめた。苛立っている  
のだ。ドアロックが壊されると思った。や  
がて音がしなくなった。諦めたのか。この  
間5分だったのか、3分だったのか。フロ  
ントに助けを求めようにもロシア語が話  
せない。夜が明け添乗員に話したがさほど  
深刻には受け止めてもらえなかった。

これを書いて今エクアドルの「特急  
誘拐」が盛んに報じられている。あの時も  
しドアを開けたならどんな展開になつて  
いただろうか。あるいは「シベリアで日本  
人夫婦誘拐」なんてことに……。

（仙台市在住）

\*\*\*\*\*

### 時の流れに悠々と

工藤英博

れる。だから時間がゆっくり進むように感  
じる。それが老年となると胸躍るイベン  
トが減り、加齢で代謝も鈍り、心を震わす感  
動に出会っても儂く消えてしまい、実際の  
時の流れを速く感じてしまう。

しかし、昨年を振り返ってみると時間の  
流れがゆつたりと、そして細かく刻まれた  
1年だった気がしてならない。それは私が  
これまで以上に、放送人の会の活動に関わ  
ることが出来たからだと思ふ。

実際、社団法人化や新会員勧誘のプロジ  
ェクト、担当している放送人の証言や様々  
なイベント・行事に参画して、新しい発見  
があったり、多くのことを学んだ。昨年10  
月の日韓中テレビ制作者フォーラム無錫  
大会では、主催の中国テレビ芸術家協会を  
はじめ大勢の人たちから現地でも温かい歓  
迎を受けて、いい時を過ごした。

しかし、今野勉会長が前号の会報で詳し  
く述べているように韓・中の開催団体は現  
役世代が中心で、制作者のOBが中心とな  
って結成された日本の放送人の会とは、そ  
の成り立ちが全く異なる。フォーラムに参  
加するわが日本の放送人の会の理事たち  
は、韓・中の幹事たちから半分敬意と半分  
揶揄を込めて「白髪軍団」と呼ばれてい  
らしい。

ともあれ、いよいよ本年は日本が開催国  
グローバル化の波にさらされる2014  
年は、これまで以上に激動の年になるだろ  
う。しかし、グローバル時代は国境を超え  
てお互いが依存し合って生きる時代であ

り、問われるのは包容力や寛容性。そういう状況の中、一般社団法人になって初めて日本開催を是非成功させて、3カ国が新たな成果を得られることを願うばかりだ。その使いよう一つで「老年の時間」はいくらでも密になると実感する年になりそうだ。

\*\*\*\*\*  
戦争を知らない世代（大学生）  
のドラマへの関心と反応

### 寒河江 正

日韓両国の間には、今尚感情を含め様々なテーマが未解決のまま残されている。

昨年（2013年）の春、tvk（テレビ神奈川）は開局40周年に合わせて、私どもの原作「あの時、ぼくらは13歳だった」（東京書籍）がドラマ演出家大山勝美さんの目にとまり、「希望の翼」のタイトルで放送された。韓国の国営放送KBSとの共同制作ということでも話題になった。

放送後、地元大学（神奈川大学、東海大学）と東京（立教大学）、茨城大学から講演依頼（私と関編成局長）を受け、更に昨年、中国の無錫で行われた日韓中フォーラムに参加された会員の川喜田尚さんの大正大学での授業（表現プロデュース論）でもこのドラマが取り上げられた。各大学の受講生は平均で50名を超えていたが（大正大学71名）いずれもドラマに対する関心が高く、2次会を設定の「高級酒場」では

講師の私を含め学生同士が熱心に討議を重ねていた。

さて学生はこのドラマにどんな驚きがあり、何を期待したのか。そしてどんな印象をもったのか。驚きの一つはどうして韓国の国営放送とローカル局tvkとの共同制作が可能になったのか、昨年の3月放映は領土問題の影響で放送中止もあり得ると考えなかったのかなど、現在の日韓の微妙な空気を読み取っていた。二つ目は原作がいつどうして監督の目にとまり、tvkへ企画として持ち込まれたのか。企画はどのように決まるのか。作品完成に至る経緯についてはどの大学でも同じ質問だった。三つ目は私ど番組制作者がいつも大事に考えていること、一番伝えたい「番組のテーマ」はなどにも迫っていた。そしてドラマを見た感想、感動的だったが一番多く、しかしわかりあい、永解することの難しさを友情をつなぐ合唱音楽の素晴らしさ。継続しなければならぬ民間交流。繰り返してはいけない悲惨な戦争についても述べられていた。印象深いのは、ドラマのラストシーン、「子ども頃の友情は住む場所が変わっても一生続く」「そしてあの戦争、本当に僕たちは戦争に振り回された」「僕たちの願いは絶対戦争のない未来だ」「そのために、戦争の辛さや悲惨さを若い人たちにきちんと伝えなさい。未来の教訓として」。録画の中で語る二人の俳優のセリフを丁寧に書きとめて感想にした学生のショートコメントがいかにも現代っ子らし

いと私には思えた。

tvkは昨年（2013年）共同制作の韓国KBSから「韓国での8月放送は延期する」との通達を受けたが、今年（2014年）の1月半ばを過ぎても放送日時の連絡がない。

多くの学生から「何故韓国では放送できないのか」との質問に私は日本と韓国の外交上の不手際が大きな原因だと思ひ、いくつかの事例をあげて答えた。

\*\*\*\*\*

オリンピック・イヤーに寄せて

### 鈴木嘉一

わが家は五輪とのかかわりが深い。

私自身、フィンランドのヘルシンキで夏季大会が開かれた1952（昭和27）年に生まれた。日本はこの年の4月に主権を回復し、独立国家として歩み始めた。ヘルシンキ大会は第2次世界大戦後、日本が初めて参加する夏季五輪となった。日本勢は、レスリングの石井庄八選手が唯一の金メダルに輝いたのをはじめ、計9個のメダルを獲得した。

母親は、第10回を数えたアムステルダム大会の1928（昭和3）年生まれである。妹はメルボルン大会が開催された56年、弟はローマ大会の60年に誕生した。このローマ大会の様子はテレビで見ただろうかはつきりしないが、次の東京オリンピックの記憶は鮮明に残っている。中学1年生ながら、日本人の1人として高揚感に浸った。

自分で家庭を持つてからも、オリンピックとの縁は続いた。結婚したのはロサンゼルス大会の84年である。柔道の山下泰裕選手たちが活躍するテレビ中継は夏休み中、旅行先の長野県で見入った。長女に続いてバルセロナ大会の92年には長男が生まれた。

夏季五輪と同じ年に開催されてきた冬季五輪は、94年のリレハンメル（ノルウェー）大会から2年ずらされた。やや影が薄かった冬季五輪の注目度は高まり、2年おきにオリンピック・イヤーがやってきた。それから20年たち、今年ロシアのソチで冬季大会が開かれる。

読売新聞社を定年退職した2012年の夏は、翌日の勤めを気にする必要もなく、ロンドン五輪を心ゆくまで楽しんだ。深夜までテレビにかじりつき、大のスポーツ好きのカミサンとともにハラハラドキドキしながら、つい「よし！」などと声を張り上げる毎日を過ごした。

もちろん、日本人選手がメダルを取ればそれに越したことはない。しかし、外国人選手の素晴らしいプレーも見たい。勝つても涙、負けても涙という光景は、4年間にわたる苦しい練習に耐え、さまざまな困難を克服し、全力を尽くした者だけが見せる美しい姿である。国籍や人種などの違いを超えて、選手たちの笑顔と涙には感動させられる。

ソチとは5時間の時差がある。2月には「真冬の夜の夢」を見るかのように、五輪

観戦で眠れない夜が続きそう。

2020年には東京五輪が待っている。この国と日本人の1人ひとりが6年後に向けて、東日本大震災の被災地の復興や原発事故の処理はもとより、それぞれの目標や希望を掲げたい。そうすれば、国内で2度目の夏季五輪は56年前とは違う形で、大きな意味を持つだろう。

\*\*\*\*\*

## 天野流と寂聴流

鈴木 典之

この年末年始、かつて仕事を通じて面識を得、以来親しみをもち続けて来た2人の著名人の言動に刺激を受け、それが小生新年の心構えに反映しています。年末は天野祐吉さん、年始は瀬戸内寂聴さんから。

天野さんは昨秋急逝され、惜しんでいたら、大晦日の朝のNHK番組「耳をすませば」で、氏の業績と遺した言葉が追慕されました。

天野さんが戦後の少年期を四国松山で過ごし、地元の『よもだ』精神に感化された話は、ファンならよく知るところでしょう。『よもだ』とはモノゴトを正面から受け止めず、一寸斜に構えてからかつてみせるという土地ことばで、それが氏のユーモアに満ちた軽妙なモノの見方の原点になったといえます。番組では、更に氏自身の口から若い頃の一つのエピソードが紹介されます。

「浅草のストリップ小屋で、踊り自慢のダンサーが衣裳を着けたままいつまでも踊り続け、場内が白けてきた時、客の一人が『もつと真面目にやれ！』と怒鳴ったので大爆笑になった。居合わせたばかりは、これぞヤジの真髄と感心し、自分も大いなるヤジリストになろうと決心した」。

テレビの番組批評の形で世間にモノ申して来て、自分の書生論っぽさを和らげようと苦心する小生にも、このエピソードはグサリとききました。天野流『よもだ』風味のスパイスが今から身に付けられるかどうか。叶わぬまでも課題です。

一方、年明け瀬戸内寂聴さんが、「特定秘密保護法反対に命を捧げたい」と決意を語ったことにも、小生感動しました。

年末あれほど大騒ぎしたのに、除夜の鐘と共に忘れ去ったような年始の平和ムードには、小生も違和感がありました。靖国参拝を含め、安倍総理の独り合点の理念主張は自己矛盾していて、国の舵取りも誤りかねず、見過ごせません。総理べつたり派は「世論が支持」と胸を張りますが、むしろ「高転び」の予感がします。

寂聴さんは若い世代に「共に立ち上がる」と呼びかけていますが、ここは、戦争の非道を体験したわれら高齢世代の出番ではないでしょうか。

\*\*\*\*\*

## 宇宙的ひとり旅へ

重延 浩

昨秋は「テレビジョンは状況である」劇的テレビマンユニオン史」という本を執筆しました。「前進し続けられるのは、自分がやることを愛していたからだ」というスティーブ・ジョブズの言葉に啓発されて書きました。

そして今年には、「君は永遠の何かを創り出したか」というジョブズからの挑発にどうこたえられるかを私の命題とします。そんな宇宙的ひとり旅をはじめたいと思います。その旅のどこかでお逢いできますように……。

\*\*\*\*\*

## 港町「横浜」の食

関 佳史

今年、横浜は開港155年。みなとみらい線の元町・中華街駅から馬車道駅までの海岸沿いのエリアを「オールドヨコハマ」と呼び、6月にはこの地域のお祭り「Y155」が開催される。行政主導で空回りしたY150の翌年から民間主導で開催され、Y200まで頑張るつもりである。この地域にあるテレビ神奈川も祭りに参加している。

開港で、欧州の文化が流入した。元町にあるウチキパンは明治21年創業。イギリス食パンを得意とし、各種の調理パンは独特の風味で人気がある。支店をださず一店で営業し続ける。元町にはファッションや街並みに加えて家具や食器といったヨー

ロッパ文化にルーツを持つ伝統も残る。

お隣の中華街も開港をきっかけに発展した。地元の間人は、何を食べるかでお店を選ぶ。例えば上海料理「大新園」の「つけワンタン」。ゆでたワンタンを醤油ペーシのたれでいただく。ツルっとした食感でビールがすすむ。「揚げワンタン」、「焼きワンタン」もある。ほかにも「牡蠣の春巻」。「もやし唐辛子そば」などオリジナルメニューが並ぶ。特色を持ち、家族営業で裏通りのおいしい店は多数ある。

戦後、本牧、根岸に米軍住宅ができ、米兵向けのバー、レストランが隆盛を誇ったが、今では面影もない。山下公園からすぐ、神奈川県民ホールのうらにある「ホフプラウ」は健在だ。ドイツ語で「ビール醸造所」の意味だが、米語ではカフェテリア形式の食堂という意味だそう。この名物はスパピザ。スパゲッティの上にピザのチーズ部分がのっている。アメリカの香りがする店だ。

大栈橋のたもとにある北欧料理「スカンディア」の名物は「スモーガスボード」。にしんの酢漬け、デンマーク・キャビアからミートボールまで数種類が一つのお盆のついででくる。比較的給料の安い北欧やギリシャ船員が横浜に多く上陸してきたこともあるのか、この地域の料理店が残っている。創業40年、50年のお店もあり、横浜の特徴となっている。

日韓中TV制作者フォーラムは、この「オールドヨコハマ」エリアの真中で開催

されることになる。ぜひ、横浜の食を楽しんでいただきたい。(テレビ神奈川)

\*\*\*\*\*

### 鶴橋康夫

お変わりありませんか？

心配事いろいろあれど春またる

すまし顔辛せ珊瑚釣り忍

凍媒やまさんがための面構え

今年もよろしく願います。

\*\*\*\*\*

## 賀春

### 中崎 清栄

温かい人情と過疎の現実を伝えたい、と制作を続けてきましたが、幸いにも「にぎやかな過疎」境界集落と移住者の七年間

(芸術祭優秀賞・地方の時代映像祭優秀賞)が全国放送されることになりました。

1月26日(日) NNNドキュメント

深夜ですが、見て頂けたら、と願っています。

\*\*\*\*\*

特定秘密保護法に

反対できないテレビ

### 堀川とん二郎

秘密法というとんでもないものが、あつという間に成立してしまつた。まさかこんな無法で杜撰なものが、まともな民主主義国家で法律として罷り通るとは予想しな

かつたのか、マスコミの対応も遅かつた。コメントーターや解説者は運用上の危惧をいうに止まり、数人のキャスターがはっきりと反対をいえたのは、強行採決が見えてからだつた。テレビ局つていうのは首根っこを押えられてるから、社を挙げて反対とかできない仕組みなんだなあ、と改めて感じた無力感。憲法改正も靖国尊崇も集団的自衛権も、そして武力衝突、開戦、徴兵と進んでも、テレビはきつと反対できないんだよ。もつと議論をつくして、とか手続き上のことをいうだけで。

国民の反応も鈍かつた。景気以外のことまで白紙委任したわけじゃないだろうに。この国民の思考停止状態に、テレビは責任がないだろうか。

右翼と目されている人たちの勉強会に出てみたけれど、猛反対して不思議な気が持がした。主に官僚の作文(法案をそう呼んだ)の粗雑さ、ご都合主義に対してだつたようだけれど。

自分も何をしたらいいのか、ウロウロして「九条の会」に署名を送つただけ。放送人の会も声明ぐらひは出せなかつたかなあ。出せないよね。政治問題には手を出せない。でも秘密保護法つて、政治問題だらうか。

\*\*\*\*\*

励むこと六つ

### 前川 英樹

① 「放送人の会」が一般社団法人化して4月で一年。何故社団化したかという理由は色々あるが、その最も具体的で切実なもの、「日韓中テレビ制作者フォーラム」の主催者としての「自立性」だろう。その「日韓中」がこの秋に開催される。9月に横浜という基本線が固まりつつあるが、開催までの時間は多くない。特別プロジェクトメンバーだけでなく、「放送人の会」のメンバー全員で実施・運営に関わり、期間中は横浜通いに励みたい。

とが上手くこなせない。悔しいので、もつと滑りに励みたい。

⑤ 自分の生きてきた時代の第4コーナーから先のあり様をしつかり見ることに、そして自分なりに記録することに励みたい。

⑥ そして、しみじみと美味しい酒を、しみじみと飲むことに励みたい。理由はいらぬい。

五つの方が区切りが良いのだが、六つになつてしまつた。マ、いいか……

長崎から

### 村上 雅通

大学の教師に転身して3年目、ようやく授業で伝えることの意味と難しさを実感してきまつた。

長崎での教員生活も残すところ1年余りとなり、今後は自らの研究活動を本格始動する予定です。テーマも見つかり、今年長崎県内を巡ることになります。長崎の大学に在籍した「証」となるような成果を出したいものです。

今年には戦争が終わつて69年。来年の「戦後70年」に向けた取り組みも始動せねばなりません。

昨年還暦を迎えましたが、もうひと頑張り。衰えていく体力に逆行する生活が続きます。

長崎にお越しの際は、是非ご連絡ください。お待ちしております。

今年もどうかよろしくお願いいたします。

\*\*\*\*\*

## ドラマ 今年への期待

### 渡辺 敏史

シニア―世界では駆け出しの私、老成しきれず、ぼやきが多い。カッコよく言えば悲憤慷慨するのだ。放送界への思いが強い所為か、特にそれはメディアに集中し、こんな世の中にしたのはお前じゃないかと、怒りを吐き散らす。正月など改まった時ほどそれはひどく、これまで、さぞかし他人(ひと)の饜蹙と嘲笑を買ってきたのでは、後で冷や汗をかいている。

ということ、今年も悲憤慷慨ネタは掃いて捨てるほどあるのだが、今回はやめる。昨年の12月22日、23日、二日続けていいものを見た。

22日はNHK708リハーサル室で、23日は国立能楽堂研修舞台で、いずれもアマチュアの人たちの舞台である。

22日は、NHK東京児童劇団のクリスマス会。中学生組や高校生組が自分たちの劇を後輩の幼稚園小学生やその家族たちに見せる毎年恒例の催しである。大人の手を借りず、練習の時間や空間を捻出しながら、脚本を作り、練り、小道具衣装を整え、演

じたその劇は素晴らしく、「芝居、こっ」を想像していた自分の不明を恥じた。特に高校生の劇はよかった。書割もなく、平台と箱足だけの芝居は、フランスを舞台に、盗賊稼業の少女がサーカス団の人たちの善意によつて正直さを取り戻し、人を信じることができるようになるという話だが、劇画風のテンポある展開と、映画上映スタイルという仕掛けで、洒落た小話風に仕上げたセンスに大いに感心した。それだけでなく、貧困、労働と搾取など、時代背景をしっかりと書きこんだ脚本の緻密さに、彼らの真面目な勉強ぶりや奮闘ぶりが窺われ、思わず目頭が熱くなった。

23日の能楽堂は、狂言「木六駄」。親方から、荷駄を負った12頭の牛を都まで運ぶよう命ぜられた太郎冠者の雪中の道行と、寒さから贈物として運んできた貴酒を飲んでしまい、次第に悦楽に浸る様を描いた大曲である。狂言は、能ほどではないが、様式に則った所作と科白で、私などの初心者には分かりにくいのは事実だが、この日の太郎冠者は、様式に演者の工夫が施され、牛を追う様や酔いに浸る様が、実に丁寧に表現され、観客を狂言の物語世界に導いてくれたのである。この演者は放送人の会の遠藤利男さん。私の大先輩でもある遠藤さんを褒めるなど、まことにおこがましいことではある。が、今回は様々な工夫に加え、演目について自らエッセイ風に解釈した冊子を観客に配った上で演じようとする、80歳を過ぎてなお、リタイアしてからの

余技、狂言に持ち続ける向上心、研究心、その若い情念に感動したのである。

児童劇団の寸劇も研修狂言も、観客は関係者だけということもあるが、観客一人一人に分かつて欲しい、喜んでもらいたいとの一心で、物語を聞かせ見せようとする(「つまりドラマ」)に必死な若者や老人(失礼!)の、そんな姿に心打たれたのである。歳末の素敵な2日間であった。

物語を見せ聞かせるドラマ、さて、テレビドラマの話である。

昨年は、二つのメガヒットドラマ「半沢直樹」「あまちゃん」に尽きたようである。「倍返し」と「じゃえじゃえ」は流行語大賞になり、年末までその話題でテレビ界は大騒ぎであった。関係者からは、ここ数年のドラマの低迷を吹き飛ばす快挙だと称賛する声も出た。

しかし、だが待てよ、だ。二つの作品を貶すつもりは毛頭ない。事実、二つの作品はヒットの要因をすべて備えた、よく考え作られた作品で、私も大いに楽しんで見た一人だ。しかし、ドラマ界全体でみるとどうか、快挙と言っている場合か、というのが実感である。民放夜間帯ドラマの平均視聴率で見ると、20%を超えた作品はわずか「半沢直樹」と「ドクターX」のみ。10%台が32作品、ひとケタのドラマが30作品と、全体でいえば、ここ数年、ドラマの視聴率は低下現象が続いている。少数のヒット作品と多数の低視

聴率作品、ドラマ世界における二極化、まるでこの世の格差社会の図式のような。この差はなぜ生じるのか。私には、逆らつて仲間外れになることを恐れ、皆がいいと言うから「いいね」、面白いと言うから「いいね」、つまり、「いいね」「いいね」の積み重ねが視聴率だと思えて仕方がない。直截的な「いいね」の重なる方が勝ち組、直截的な「いいね」が集まらないのは、少数組として負けとなるのだろうか。そんな二極化現象は、自身の目利きによつて判断するのではなく、ブランド品に群がり、自民主、自民と、いとも簡単に勝ち馬に乗り替えてしまう我々日本人の恥部を見るように、いかにも気持ち悪いのだ。

また、ぼやきになりそうなので、いい話をする。今年、ドラマ界が光明を見いだせるかもしれない、二つほどの材料がある。ひとつは、アイドルなして適材適所のキャスティングに徹した「半沢直樹」の大ヒットと、アイドル起用作品の不成績という、昨年の結果がもたらす効果である。F2をターゲットとした、これまでのアイドル起用「数字ねらい」の企画に代わり、あくまでも良いドラマを作りたい、見せたい、そのため脚本に重点を置く、原点に戻った企画が出てくる気配があることである。もうひとつは、地方局(大阪、名古屋を除く)制作ドラマの増加である。NHKではここ数年地域局制作ドラマが増えてい

る。昨年一年間で、全国放送（BS・プレミアム）されただけでも10本以上。今年も同数程度は制作されという。民放でも福岡

北海道、沖縄等、ドラマが数多く制作されている。ただNHKと違い、なかなか全国では放送されない。通販番組だらけのBS波にはいくらでも枠がありそうものをと、余談だが、これもぼやきのネタだ。いずれにしる、これら作品は、制作のハードルが高いせいで、企画性が高く、視聴率にこだわらない、思い切った作品ともなるし、新しい作家も誕生する。事実、NHK徳島の「狸な家族」、北海道HTBの「幸せハッピー」など秀作も多い。これらの二つの流れが今年のドラマ界に変化を促すかもしれないと期待したい。

私が昨年歳末の2日間で出会った、物語を「伝えたい」―「分かっただけは、喜んでほしい」というアマチュアの人たちの真剣な思いと努力は、ドラマ作りの原点でもある。

今年こそ、物語を伝えたいと原点に戻って努力する、空に湧き上がる数多ある雲の如き多種多様な多彩なドラマ作品が、いずれ、どこを切つても金太郎飴のような「数字狙い」のドラマにとつて代わり、視聴者自身の目利き力を高め、ドラマを楽しむ選択の幅を広げて欲しいと切に望むのである。

## 第42回放送人句会

平成26年1月8日（水）於：赤坂・麦屋

選者：星野高士 出席：伊藤視郎、荻野慶人、鶴橋康夫、豊田まつり、新村もとを、橋本きよし、林備後、森治美、西川阿舟不在投句：山泉ぼん太

### 【星野高士特選】

小豆粥わが容貌の曾父に似し きよし  
小豆粥五体温めて腹に落ち もとを  
小豆粥一杯食べて酒少し 備後  
へなちよこの脇差しをを抜く寒さかな ぼん太

持道具にもそれ〴〵の初芝居 備後  
伊勢海老やアメ横の呼び声高し もとを  
初風や歩の行く先に津波の碑 ぼん太  
小豆粥神を真中に箸を持つ 治美  
【星野高士選】

初風に沖見遣りつつ網手入れ もとを  
伊勢海老を持道具とし漁夫演ず 治美  
三食を小豆粥なり夜半の咳 康夫  
初風や涅槃しとねの淡き彩 康夫  
また一歩時の旅人小豆粥 康夫  
持道具一つで場面初戎 慶人  
伊勢海老に負けぬ旨さの海老もあり 阿舟  
初風の海にサーファー波待てり 阿舟  
病床の枕元にも小豆粥 治美  
鉛筆を削り揃へて初句会 きよし  
伊勢海老の物々しさや武家屋敷 ぼん太  
初風や航空母艦停泊す 視郎

初風や鰯を漕ぎ行かん島社 阿舟  
浜長者伊勢海老飾り麗々し もとを  
一人来て一人に余る初風ぞ 康夫  
禅寺の一期一会や小豆粥 備後

伊勢海老来おがくづの中生きてをり 阿舟  
本復を祝ひて囲む小豆粥 もとを  
初風や客船眠り未だ覚めず 視郎  
小豆粥叔母は又その叔母上に まつり  
小豆粥亡き母の声したやうな 慶人  
初風の海峡鯛の一本釣 阿舟

### 【会員互選】

正座することも難行小豆粥 備後  
小豆粥おぼばが膳にまだ着かぬ ぼん太  
塩味にしても香りて小豆粥 まつり  
祝宴へ大伊勢海老の着座せる ぼん太  
老々の夫婦善哉小豆粥 慶人  
初風に今顔見せる朝日かな 治美

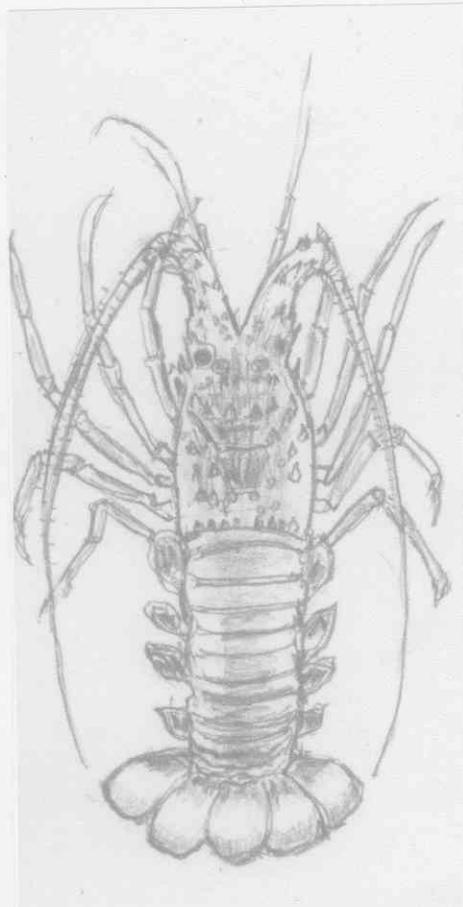
伊勢海老の先づは髭より籠を出づ 備後  
茹でられて伊勢海老になほ威風あり 備後  
初風に旅人ひとり訳あり気 慶人  
兄は胤弟独楽が持道具 視郎  
初風や富士を拝みてまた居眠る もとを  
初風や逆光に浮く島一つ ぼん太

初風や海にはだかる大鳥居 備後  
初風や航行標示「FREE」なり 視郎  
小豆粥神を真中に箸を持つ 治美  
寒牡丹とかぶらぬ色の持道具 阿舟  
初風やけふの寝食とりあへず まつり  
初風や阿鼻叫喚が夢のやう 慶人  
伊勢海老は加熱したので赤いのね まつり  
伊勢海老を網からはすすややくしき 視郎

【選者吟】 星野 高士  
初風や島の社に主はなく  
伊勢海老の少し動きしかと思ふ  
初風の傷なき日矢を受け容れて  
初風に連絡船の遠汽笛  
十五日粥の部屋の灯暗からす  
ふるさとの話しに触れず小豆粥  
持ち道具また見直して飾海老

### 次回放送人句会

3月12日（水）18時頃から  
赤坂・麦屋  
兼題：陽炎、鳥帰る、鱈、吹き替え



## 第16回 放送人の世界

### 鴨下信一 ～人と作品～

日時

12月6日(金) 18・30～21・00

12月7日(土) 14・00～19・00

会場・上智大学

今回の「放送人の世界」は会場を四谷の上智大学に移し、放送人の会と上智大学メディア・ジャーナリズム研究所の共催の形で行った。参加者は放送人の会会員、上智大学学生、そしてチラシなどの呼びかけで集まった一般参加のひとの合計約50名であった。

聞き手は本会会長の今野勉氏。上智大学の担当は音好宏教授とサポートの形での渡辺久哲教授。会場の設営、会の司会進行は上智大学学生の手で行われ、会が終わったあと四谷しんみち通りの居酒屋で参加者と学生たちの交流会に参加者のほとんどが参加した。音教授の案内だったが、学生たちのゼミの忘年会と放送人の会会員の飲み会の合休体のようであった。



上智大・音好宏教授

鴨下氏は博覧強記で、制作時の細部についても正確な記憶で実に多くのことを語ったがその断片を採録すると…



左・鴨下信一氏 右・今野 勉氏

鴨下 ぼくはバラエティーや音楽番組のD専門で評価されていましたが、失明するかもしれないと言われ、現場は無理だろうと編成部門への異動の打診がありました。しかし、制作部門に残ってドラマをやる道があり、「岸辺のアルバム」を担当しました。

ちょうどテレビドラマは、編集がかなり自由にできる、小型カメラでロケが楽だ、TSL(テープスピードロック)が使えるといった技術革新が続く、Dをやりたいと切実に思っていた時期です。

ぼくは東京下町育ちです。下町では近所の魚屋のおばさん、八百屋のおばさんなど

がごくふつうに歌舞伎座や新橋演舞場に行き、みてきた芝居の話をします。藤原歌劇団のオペラや上野鈴本にも親戚のひとに連れてってもらいました。そんな下町感覚で「サザエさん」や「日曜劇場」などをやり、視聴率はけっこう稼ぎました。コメディもかなりやりました。コメディは一段下のものとみられていましたね。音楽はもつと下で、特に演歌やジャズは更に下でしたが、一方、芸術作品はひとを楽しませない。

「岸辺のアルバム」は下町感覚、展開のサスペンス、編集、キャストینگが優れていました。演出上は家族の日常性に留意し、編集と音響技術は今見ても優れていると思う。ジャニス・イアン主題曲もいい。八千草さんは主婦役の第2候補でしたが、「私もいつまでもおとなしいお嬢さん役の延長ではしようがない」と意外に乗り気で引き受けて貰いました。しかし、台所の主婦の所作が慣れていなくて、随分勉強込んだ。

「女たちの忠臣蔵」については、ぼくはもともと歌舞伎評論家志望で、時代考証には自信があり、後に時代劇を演出した時は時代考証は専門家に頼まず、時間をかけてでも自分でやりました。一度もクレームが来たことはありません。(以下略)

### 時折之紫烟日記

松尾馬笑翁

経緯を詳述する余裕はないが「明日、ママがいない」をめぐるモメている。「このどりのゆりかご」(捨てられた赤ちゃんを救うポスト)を設けた熊本市の病院や児童福祉協会が児童の人権を理由に放送中止を要望した。

ところで近ごろ、ドラマでタバコを吸うシーンがめっきり減った。80年代までは例えば外科医有森冴子(三田佳子)の奔放な態度を喫煙シーンで強調したり、拘置所から出所した親分が一服くゆらしながら「青空に目をやり「シャバはいいなあ」とか、取調室で容疑者に両切りを勧めるホトケの刑事に男が「ダンナ、実は…」なんて場面がなくなった。コワイ嫌煙団体がちがつくからだ。といって分煙室じゃ絵にならない。昨今のヘビースモーカーは寒空のオフィスビル屋上が喫煙シートの決まりになってしまった。それだけでなく情報連絡機能を果たしていた屋台のおでん屋や小料理屋が少なくなりケイタイやスマホが代行している。ドラマ全体の骨格が貧しくなりゲームの画面のようにつまらなくなってきた。私にとっては「明日、タバコが吸えない」ほうがサベツなのですが…

## ラジオのページ ⑬

\*今号から「ラジオのページ」は2ページです。

### お正月のラジオから

#### 武本宏一

お屠蘇気分も抜けないまま、今回もラジオオについてあれこれ記すことにする。

先日「学士会報」正月号で知ったことなのだが、中国ではラジオのことを漢字でどう書くのかご存知だろうか。

「收音機」と書くそうである。私も初めて知った。

たしかに、「收音」までは分かる。しかし、「机」とは一体どういう意味なのか。

なんでも「机」は「キ」と読み、「機」と同音である。現在中国で一般化した簡体字では同じ発音のものは画数の少ない、書き易い方の字を採用するらしい。

なるほど、「收音機」ならばたしかにラジオのことであろう。

では、携帯電話は何と書くか。こちらは「手机」と書くそうだ。手で字を操作する機器というわけだ。決して「小さなデスク」という意味ではない。

ラジオはたしかにこの日本でも「小さな收音機」になってしまった。

かく申す私も、いまラジオを聴くには、その「手机」、つまり携帯のスマートフォンを使って、「NHKのらじるらじる」や民放の「RADICO」を呼び出して、イ

ヤホンで聴くのがほとんどだ。

どうしても生放送で聴けない場合は、長さ10センチほどのラジオ付きICレコーダー(SANVO)で録音をとり、あとで再生して聴いている。

テレビの白熱する大型化・高精細度化競争などと比べると、どうにも気分昂揚までに時間がかかる。困ったものだ。

これではイカン、と正月元旦の新聞のラジオ欄に目を通すと、二つのラジオ番組が目にとまった。

一つは、百田尚樹氏のベストセラー、昨年の本屋大賞も獲得した小説「海賊とよばれた男」が、夜7時からニッポン放送で、オーディオドラマとして放送される。

もう一つは、これも昨年に野間文芸新人賞を得た話題の小説「想像ラジオ」の作者いとうせいこう氏が司会をつとめる対談スペシャル「不安社会の道標」という番組だ。こちらはNHK第1で、夜9時05分からの2時間安組。

二つ共に、放送作家から作家に転進した新鋭によるもので、大いに期待をもって聴いた。

まず、ニッポン放送の「オーディオドラマ・海賊と呼ばれた男」。

ABCの人気テレビ番組「探偵ナイトスクープ」の台本を永らく手がけた百田氏。このころ旧作の「永遠の響」も映画化され、時の人となっている。

そのベストセラーのドラマ化というの

で、注目して「收音機」にかじりついたのであるが、ドラマの作りとしては比較的平坦で、効果音や劇伴(伴奏音楽)もあつさりと扱われ、オールドヘヴィリースナーにはやや物足りなさも感じた。

しかし、よく聴くと、これは産経新聞と連動して、いずれ「ドラマCD」としても発売されるとのことで、目の不自由な方々のための「聴く小説」でもあり、朗読中心の分かり易いストーリー展開を重視してのものだったかもしれない。

さて、もう一つのNHKの新春対談スペシャル「いとうせいこうの不安社会の道標」、こちらは大いに聴きこたえがあった。

その前に、私も勿論、昨年の芥川賞候補になった小説「想像ラジオ」は読んでおいた。

一読、この小説は私の想像していた以上の読みもの、いや聴きものと言つてもよい程の、音感あふれる小説だった。

あの3・11東北大震災の大津波で流され、いつの間にか1本の木の木の上に仰向けに横たわっているラジオのディスクジョッキー、DJアークなる男が、様々なリクエストを紹介しながら音楽をかけていく。

しかし、それらのリクエストは、皆同じようにあの日津波で没した死者からのものだ、と分かる。

死者はとかく忘れ去られてしまいが、あの声をいつまでも生者は聴きとり、死者と

対話し続けることこそ生者のつとめである、とつくづく思われる。

そのいとうせいこう氏は、マルチメディアに活動する放送作家でもあるが、この夜のNHKで対談した、スポーツの為末大、そしてアンチ建築の雄とも言われる坂口恭平両氏との対談は、それぞれ文明の本質を縦横に分析し明日を模索するまことにスリリングな対談番組であった。

さて、この4月には、かねて懸案のデジタルラジオの本放送が始まる、と聞く。

私もこの小さな「手机」をもっと活用して、ラジオの今を聴き逃さないようにしなければ…。

### 小室等の「フォークメイツ」

#### 田中秋夫

フォーク界の長老・小室等君が昨年11月に70歳の誕生日を迎えた。我々「ラジオと歌の会」のメンバーが集まり、ささやかなパーティーを開き彼の古希を祝った。若い頃から爺さんのな風貌だった彼に年齢が遅ればせながらやと追いついた観がある。前述の会とはフォークの黎明期に係わった人達が自然発生的に集まって出来た会で、麻田浩、北山修等アーティストとラジオ各局のフォーク番組制作経験者、構成作家、それとプロダクション関係者20人程が年に数回旧交を温めている。放送局

や職域の壁を超えた交友関係は珍しいと思われるが、彼らには共通に新しい音楽文化を創るといふ同志的連帯感が生まれてきたように思う。1960年代前半、J・バエズやキングストントリオ、PPMの来日によってフォークブームが始まった。各大学でアメリカンフォークのコピーバンドが結成され、カレッジフォークのムーブメントが起こる。小室も、61年、多摩美在学中にPPMフォロワーズを結成し、PPMのコピーバンドとして活動し、人気を集めていた。彼らが画期的だったのは英語の原詩を和訳して歌っていた点だった。当時、フォークの嚆矢の番組だった文化放送の「フォークの嚆矢の番組だった文化放送のいずみたく司会「フーテナリー」66」にも常連で出演している。やがて、学生バンドの多くは卒業の季節を迎え、就職のために活動をやめていった。しかし、将来設計が見えない中でも音楽活動続ける者たちがいた。小室も、68年に新たに六文銭を結成しオリジナルの作品に挑戦し始める。当時、70年安保をめぐる全共闘運動が激しい時代で、フォークの神様と呼ばれた岡林信康たち関西のメッセージフォークが脚光を浴びていた。岐阜県中津川で、69年から3年間行われた「全日本フォークジャンボリー」でも関西フォークが中心だった。しかし、小室は「歌はアジテーションの道具ではない」として彼らとは一線を画していた。その後、メッセージフォークは全共闘運動の消滅と共に消えていった。一方、国内の大衆音楽は演歌の全盛

時代で、TVやラジオのゴールデンはそれで占められていたが、洋楽ファン筆者はこの状況に不満を持っていた。そして、72年9月、新番組「小室等のフォークメイツ」をスタートさせる。番組では彼の音楽談義を中心にフォーク界の新しい才能を紹介すると同時に、コンテストを開催し、新人の発掘にも取り組んだ。（提供は三ツ矢サイダーで昨年早世した大滝詠一のCMソングも話題だった）その頃、六文銭は上條恒彦と組み、小室作曲の「出発の歌」で第2回世界歌謡祭のグランプリに輝き大ヒットとなった。これを機に拓郎や陽水等フォークのヒット曲が続々と誕生するようになる。75年に彼は拓郎、陽水、泉谷とフォーライフレコードを設立し初代の社長に就任。業界の常識を覆す大事件であった。その後フォークはニューミュージックへ、さらにJ・POP全盛時代へと成長し現在に至っている。大衆音楽状況の変化は日本人の感性に大きな影響をもたらしたに違いない。小室は音楽活動歴52年を迎えた現在も年間100本を超えるライブで日本列島の隅々まで歩き回る他、TV、映画、演劇へ音楽を提供するなど精力的に活動を続けている。さらに憲法9条の会傘下の「マガジン9」の発起人を引き受け、時代の右傾化に警鐘を鳴らす他、反原発集会に参加する等、活動の範囲を広げている。彼は今も一貫して「Folkll庶民」の側に立つ「Mateessll仲間」である。

## 放送人の会の会員でないラジオ局の現場の人への手紙

加藤 節男

貴兄は昨年12月28日夜9時、NHK・BSプレミアムで放送された「井上陽水 ドキュメント「氷の世界40年」」日本初ミリオンセラーアルバムへの衝撃とその時代」を見ましたか？

「氷の世界」はご存知ですよ。

井上陽水（以下、みなさん敬称略で）25歳の時の作品で1973年12月に発売され、日本で初めて売り上げ100万枚を達成した傑作LPです。

番組はそのLPの16トラックのマルチテーパーが見つかったのを機に、本人を含め、制作スタッフが制作過程を振り返る、サブライズもある証言を縦軸に、「氷の世界」をリアルタイムで聞いた著名人たちとラジオ番組でリアルタイムに作品と人を紹介していたアーティストたち、そして、リスパクト的に楽曲分析するアーティキュラたちの、その人らしさ、また、ハツとするコメントが挿入され、井上陽水が「40年前の自分と向き合い、収録曲を演奏する」（番宣資料）75分番組でした。

上記出演者はみな著名人でNHKの番宣資料に名前が載っています。

しかし、番組の縦軸を担っていた、本人の希望で声だけの出演だったプロデューサーの多賀英典、アシスタント・プロ

デューサーの川瀬泰雄、アレンジヤーの星勝など時代を画したLPの制作スタッフの名前はありません。

さらにもうひと組、載っていない出演者がいました。

「野見山實、井上悟、塩瀬修充」。

貴兄たちは誰も知らないでしょう。RKBラジオと東海ラジオの元番組制作者と元アナウンサーです。

彼らは、アマチュア時代、芸名「アンドレ・カンドレ」時代、そしてまだ無名だった井上陽水時代に彼の作品と才能を高く評価、楽曲の録音やアドバイスし、そして番組やライブで井上陽水を絶えずサポートしていたのです。

1960年代後半から70年代前半、ローカル局を中心にラジオ局には、東京発でない、テレビ発でない、レコード会社発でない才能と音楽を探し、育てた人たちがこの三氏の他にも数多くいました。

既に飽き足りなかったのです。

ラジオが若者に再発見され、日本の音楽シーンが変わろうとする「時の運」もありましたが、彼らが見つけ出し、育てたアーティストやタレントはその後、長くラジオ界と音楽界の財産となりました。そして何より自分の財産に。

何故、私が三氏の名前を知っているのか？答えは簡単です。私もその片隅にいたのです。

誰かがそれぞれの存在を教えてください。ある種の連帯感がうまれたのです。私は三氏にお目にかかったことがありますが、一度もお目にかかっていないが良く仲間だったと思えるラジオ人がたくさんいます。

貴兄も自分の財産、ラジオの財産を改めて作ってみませんか。必ず、同じ志を持ったラジオ人が出てきますよ。

追伸：井上陽水が改めて歌った曲には「氷の世界」、「心もよつ」、「帰れない二人」もなく、おそらく番組制作者の好きな佳曲が並び、よかったです。

## ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ いろはに時代劇〜その八〜

菅野高至

俳優の佐藤慶さんと、初めて出会った作品は、83年1月放送のドラマ人間模様「夕暮れて」(全6回、作：山田太一)であった。人生の夕暮れ時にさしかかった中年夫婦の危機を、老人問題をからめながら描いたものである。

或る日、同窓会に出てなつかしい想いがつまった夫(佐藤慶)は、妻(岸恵子)に内緒でアパートに部屋を借り、青春を取り戻そうとする。一方妻もバードウォッチングに誘われて……と言う作りだった。夫は念願叶って、女子大生(眞野あずさ)を部

屋に誘う、だが何も出来ずにたた話をするだけで終わるといふシーンを撮った。

眞野さんは週刊朝日の表紙でデビューしたばかりの新人で、いかなべテランの佐藤慶さんでも、切なくも可らしい二人の関係にはなかなかならないのだ。それでも諦めきれずに、眞野さんの芝居付けに悪戦苦闘し、リメイクを積み重ねる私に、「慶さん」は文句も言わず辛抱強く付き合ってくれた。

そう、慶さんは素敵な役者である。

だが、「夕暮れて」ではスタツフ一同、強面の慶さんを敬して遠ざけていた。収録が済んでも、早々に、お愛想もナシで伏し目がちで送り出した。というのも演出チーフFさんの厳命があつたからだ。

「佐藤慶は酒乱だから、収録後、決して飲み誘われぬよう、彼の収録を午後3時までに終わらせる。そう言うロール表を組むべし！」と。

慶さんが強面なのに、愛嬌のある可笑しい人だと分かったのは、それから2年後、85年6月放送のドラマ人間模様「國語元年」(作：井上ひさし)である。彼の役は、会津出身の浪人で、名は若林虎三郎、義賊気取りの「盗人らしい」という設定だった。会津若松生れの慶さんは、先祖代々会津藩士の家柄である。共演者がみな、長州、薩摩、尾張、遠野、津軽、米沢、江戸山の手・下町など、それぞれのお国言葉を感じるのに汲汲としているのに、一人涼しい顔でネイティブの会津訛りを操り、

飄々として楽しんでた。

時には緊張し過ぎて固くなったスタジオで、駄洒落を飛ばして笑いを誘う、気遣いの人でもあつた。優しい役者である。

思えば、この「國語元年」は明治初期の設定で、明らかに時代劇だったのだが、撮っている本人にその自覚は無かつた。市川の井上家に泊まり込んでホン待ちをした苦勞が実り、シチュエーションコメディをただただ楽しく撮っていると思つていた。今見ると、時代劇の様式を外さず、しつかり時代劇を作っている。

それから、86年の8月、私は大阪放送局に転勤になる。慶さんと風間舞子さんが、新宿の小さなバーで送別会を開いてくれた。酒の飲めない私をなぜ誘ってくれたのか、ことの経緯は全く記憶に無い。慶さんは「美人と一緒に飲むと僕は暴れないんだ」と冗談のように言い、そしてその通り、慶さんの武勇伝(?)の教々を肴に、楽しい一夜となつた。

そして7年後、「清左衛門残日録」である。慶さんは俳優座の4期生で、仲代達矢さんと同期だった。放送の時、64歳、仲代さんが60歳、共演の加藤武さんが64歳、鈴木瑞穂さんが65歳、内藤武敏さんが66歳、みなかつては「新劇」のライバルであり、仲間でもあつた。スタジオ前のロビーで出番待ちをする間、自然とみなが集まり、まるで同窓会のようになつてしまふ。

某氏が大病して治つたとか、いや長くは無いらしいとか、誰々が若い嫁さんを貰う

とか、話題は色恋の噂より、病氣や子供の話を中心となる。老いの始まりは清左衛門と同じだった。違ふのは、役者には停年退職が無いことで、病氣自慢をしつつも、仕事ではライバルだった。

「えつ、あんな役……あの役、お前に回つたの！俺、断つたんだけれど、スケジュール合わなくてさ……」

思わず、聞かなかつたふりをする。役者の同窓会には些かスリリングな会話もあつたのだ。

慶さんの役は、金井奥之助25石。第一回の冒頭、奥之助は清左衛門270石と、30年ぶりに再会する。零落した無残な姿をかつての親友だけにはさらしたくない、奥之助の切ないまでのまなざしが記憶に残っている……。

名優の佐藤慶さんは、2010年5月、81歳で亡くなる。その年9月「慶さん」を慕い、偲ぶ会が開かれた。マネージャーの活動屋の城さんが仕掛けた、素敵な会であつた。

湿っぽくなつたので、ホン作りの話に戻る。第十回の「夢」の話である。清左衛門は大雪の夜、訪ねた家を辞して帰路につくが、雪に降り込められ、危うく凍えそうになる。そこをみさ(かたせ梨乃)に助けられて、涌井で一泊する。したたか飲んで酔いつぶれて、夢うつつの中でみさが布団に入ってくる……。

竹山さんとの打合せは、5分とかからなかつた。面白くて深い時代劇を連ドラ枠で

作りたい、当初の目標はほぼ達成されていた。番組の評価も定まっていた。なにしろ竹山さんとの格闘に疲れてもいた。だから構成であれこれ言っまい、竹山さんの思うとおりに、「夢」は書いて貰おうと決めた。

打合せの席に着くや、彼は「二晩くらいの設定で作りたい……」と言ひ、私も「一幕物の作りは僕も好きですから、お任せします」とあっさり答えて打合せを終えた。打合せが直ぐ終わった理由は、他にもあった。「清左衛門」全十四回（4月〜7月）の後に、夏休みを挟んで、9月から、平岩弓枝原作「はやぶさ新八御用帳」全二十四回が控えていて、その脚本作りが急がれたからだ。

脚本家は下川博さん、井上由美子さん、大久保晶一良さん、坂田義和さんであった。企画書に脚本家の名を四人書いて、口の悪い先輩に「最初から四人も脚本家を揃えて、負け戦か!」とからかわれた。

スタッフは演出チーフが先行するだけで、同じチームで望む。つまりは竹山さん、そっこのので、私は四人の脚本家とホンを作りにすることになった。

「清左衛門」はなんとかなるでしょう。ただ待てばいいと、安心しきっていた。だが、任された竹山さんは「もう書けない」と思い込んで、疾走してしまっ……。(つづく)

## 会員名簿

2014.01.24 現在

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石高健次 石橋健司 石橋冠 磯智明 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】上田洋一 上村忠 碓井広義 臼杵敬子 歌田勝彦 宇野昭 【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大池雅光 大蔵雄之助 太多亮 太田敬雄 太田昌宏 大西康司 大西文一郎 大野秀樹 大原れいこ 大山勝美 大類啓 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡村黎明 小川治 小河原正巳 沖野暁 萩野慶人 尾田晶子 小田久榮門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤節男 加藤拓 加藤迪 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 鎌内啓子 上安平冽子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 川口幹夫 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 児玉久男 後藤和晃 小山帥人 近藤一男 近藤晋 今野勉 【さ】斎藤伸久 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤敦 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田昌平 嶋田親一 清水満 下崎寛 下重暁子 白井博 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木典之 鈴木道明 鈴木嘉一 須磨章 【せ】関佳史 せんぼんよし 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】崔銀姫 【つ】辻本昌平 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 西ヶ谷秀夫 西川章 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫 【は】橋本潔 林健嗣 原由美子 原田令嗣 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤久ミネ 【へ】逸見京子 【ほ】星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本修 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑛一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】横山英治 吉澤保 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】和崎信哉 渡辺紘史

## 編集後記



放送人の会忘年会・12月13日(金)  
於・青山 Un Cafe

▼新春の挨拶・感想にたくさんのご寄稿ありがとうございます。▼編集部、事務局には放送番組センター峰野さん、日本放送作家協会、永和総合事務所須永さん、町並さん、赤坂・表屋などからも賀状をいただきました。▼新入会員は前号で紹介した方とあわせると30名を越えます。これで勢いがついてもっと会員が増えると期待しています。▼新春放送人句会は兼題の伊勢海老にちなむどんな海老料理が出てくるか、まさか本物の伊勢海老は出てこないだろうと思っていました。大きな味噌汁仕立ての鍋に乗って堂々たる本物が出てきました。参加者が10名と少なく、たっぷり賞味できました。ごちそうさま▼掲載した伊勢海老の絵については「これはエセではなくほんもののイセエビだ。イセーがいい」とお褒めをいただきました。(視郎)